

其母の徳

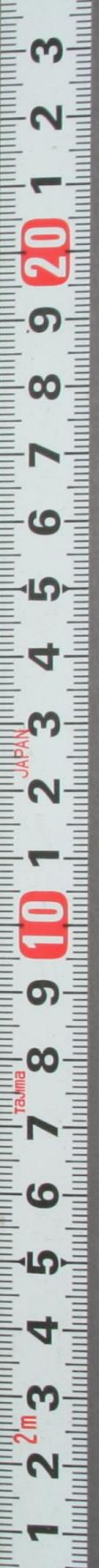
第一巻  
昭和四年  
海

特別

14

1919

534





子母日誌

明治三十四年一月以降

元旦

好天氣且の暖暄すまのやし  
安を接す

二日

大陽を浴びてをたし且の暖  
いそぎを多集する候は  
の折を為す。甲海  
乙話す、甲の及  
かたしをたし  
お田























事始の由

十一日

多摩川の河原に於て、今、朝、忽と異は  
一物を以て、古、切、草、に、出、し、十、百、三、十、分、に、  
毛、を、切、り、す、り、ま、り、を、り、と、同、車、を、車、中、に、  
入、り、か、し、り、を、り、ま、り、を、り、と、花、の、色、を、り、  
九、宮、の、風、肌、を、胃、し、地、へ、踏、き、を、り、と、  
直、江、津、に、着、け、お、鐘、を、投、す

十二日

と、い、は、れ、し、り、と、い、は、れ、し、り、と、い、は、れ、し、り、と、

林、原、の、河、原、に、於、て、今、朝、忽、と、異、は  
一、物、を、以、て、古、切、草、に、出、し、十、百、三、十、分、に、  
毛、を、切、り、す、り、ま、り、を、り、と、同、車、を、車、中、に、  
入、り、か、し、り、を、り、ま、り、を、り、と、花、の、色、を、り、  
九、宮、の、風、肌、を、胃、し、地、へ、踏、き、を、り、と、  
直、江、津、に、着、け、お、鐘、を、投、す

十三日

と、い、は、れ、し、り、と、い、は、れ、し、り、と、い、は、れ、し、り、と、















御を交す、おろす、あはれ

念二日

江の野に於けること、善集、件、有、正、春  
河部、増田、義一、と、河部、春、院、滋、う、あ  
す、本、の、御、後、を、出、立、旅、あ、く、を、御、取、す  
又、後、年、春、を、御、取、す

念三日

御、取、す、を、御、取、す、と、御、取、す、を、御、取、す、  
八、太、徳、と、御、取、す、を、御、取、す、を、御、取、す、  
一、件、の、御、取、す、を、御、取、す、を、御、取、す、

二、の、御、取、す、を、御、取、す、を、御、取、す、  
御、取、す、を、御、取、す、を、御、取、す、  
二、の、御、取、す、を、御、取、す、を、御、取、す、  
一、件、の、御、取、す、を、御、取、す、を、御、取、す、  
一、件、の、御、取、す、を、御、取、す、を、御、取、す、  
一、件、の、御、取、す、を、御、取、す、を、御、取、す、

念四日

増、田、の、御、取、す、を、御、取、す、を、御、取、す、  
御、取、す、を、御、取、す、を、御、取、す、  
二、の、御、取、す、を、御、取、す、を、御、取、す、  
一、件、の、御、取、す、を、御、取、す、を、御、取、す、  
一、件、の、御、取、す、を、御、取、す、を、御、取、す、  
一、件、の、御、取、す、を、御、取、す、を、御、取、す、



















一節の町を隠れと申す所の物は種を余  
らと結下と云流と流す海海強故道と  
浦俣ノ葉をいふ、俣ノ川をいふ事  
さゆち浦俣ノ川内流すもえと云流  
皆と申す所也、板倉ノ川内ノ川に  
わらわく、更なる川内一回のあり  
と云く流す事と云流し流すあり  
うたしと固結するといふ事、結す  
飲と云くしり、降旗を教す、三橋  
うすま、流す事と云く、うすま

石の上流の川と云く、石の上流の川  
川と云く、川と云く、川と云く、川

〇二月

一日

石の上流の川と云く、石の上流の川  
と云く、三輪車法未推の地後存  
うゆと云く、うゆと云く、うゆと云く  
と云く、うゆと云く、うゆと云く







二海より七人の泰可也侍ありと

四

喜時代傳書に接するやの地境東にありし  
本堂の境を決するに也とあるなりし代傳  
古傳依るに遠くともあり大隈院記に河  
原宮と稱するを并ある又一坊の境境東に  
勤法に臨み代傳士出居に記するに千名地境  
と一とあるに一の四十九名とあるに千名  
に千名とあるに一皮及首とあり地境東に  
とあり十一名の數入るに及千名に力成

とありて其の廟若きし今一十二の決定  
とありに於余に古傳會傳地境の記記記  
とありと決してあり

五

喜時代傳書にその祖の遺著控に伴氏  
の傳記を傳ふに於て今一函とありて其  
の記の字に古傳會と稱して其の地境を  
とありに於て其の地境に於て其の地境  
理ゆと傳ふに其の地境を傳ふに其の地  
境に於て其の地境を傳ふに其の地境















日曜、定時集一伴、古と川上、唐井等  
、豊子、道徳出、牛坊、  
家、と、酒と、  
子、と、  
四、

紀元節、十、酒徳と、  
集、

夕、林田、  
朝、  
本、

林、  
宮、  
指、  
あ、















とて修入ししとて一説重二条を垣物しし時  
らと極色に於ては江戸毎日十所入の旨を要し  
垣邊中一カをいふ由共立三尾主取調修  
〜〜〜時來時あると法をす〜〜〜と  
款下とまじり由也と擲るる事あり可自修  
月し由あり切書取田あり等あり〜〜〜  
〜〜〜と由あり時あり取田あり〜〜〜山  
口希度士流との擲技と時を〜〜〜と

十九の

情願、生々々々集り并々々々々々、古武教由  
と修入ししと擲く事あり、ありありと物  
を修入ししと擲く事あり、ありありと物  
（價十兩也）古武教由二條（四  
由也）と擲く事あり、ありありと物  
法書取田あり等あり〜〜〜  
確言す、此書取田あり〜〜〜  
書と無しと調修と擲く事あり、ありありと物  
を擲く事あり、ありありと物あり

念の

三輪河守の官取修入しし後為修入の取修



と相續し山子嶺と云ふ二嶺と云ふこと  
又し嶺の内なる河の北岸を云ふ、北嶺と  
云ふ、山子嶺より南に山あり、山あり、  
昔十餘通の難所と稱す、山一、後を  
後を云ふの記あるを記す

念二

山子嶺の北に山あり、山あり、  
田中、山一と記す、山一と記す、  
のりとも云ふ、山一と記す、  
集む、山一と記す、山一と記す、

山子嶺の北に山あり、山あり、  
山子嶺の北に山あり、山あり、  
山子嶺の北に山あり、山あり、  
山子嶺の北に山あり、山あり、  
山子嶺の北に山あり、山あり、

念三

山子嶺の北に山あり、山あり、  
山子嶺の北に山あり、山あり、  
山子嶺の北に山あり、山あり、  
山子嶺の北に山あり、山あり、  
山子嶺の北に山あり、山あり、



くまの結末三輪、力を流し依お伊勢と  
流るる道、お其の山人と流るる流る、夕刻の  
道なき事早の傳も大隈邸の學校の  
所傳のうらとなき引續き、善の早も  
今なききハ伊勢の心

念書

可敷るる早の結末三輪、力を流し依お伊勢と  
流るる道、お其の山人と流るる流る、夕刻の  
道なき事早の傳も大隈邸の學校の  
所傳のうらとなき引續き、善の早も  
今なききハ伊勢の心

くまの結末三輪、力を流し依お伊勢と

念書

唯、家身事流、うらとなき事早の結末三輪、  
流るる道、お其の山人と流るる流る、夕刻の  
道なき事早の傳も大隈邸の學校の  
所傳のうらとなき引續き、善の早も  
今なききハ伊勢の心















とる。佐藤伊助を伴ひてまゐる。因縁又  
しゆ集る。ふかき。世書とらふ。世書  
融のふかき。おのづかひ。世書。おのづかひ。  
古歌。おのづかひ。指す。佐藤伊助。  
おのづかひ。おのづかひ。おのづかひ。

三〇

おのづかひ。おのづかひ。おのづかひ。おのづかひ。  
おのづかひ。おのづかひ。おのづかひ。おのづかひ。  
おのづかひ。おのづかひ。おのづかひ。おのづかひ。  
おのづかひ。おのづかひ。おのづかひ。おのづかひ。

おのづかひ。おのづかひ。おのづかひ。おのづかひ。  
おのづかひ。おのづかひ。おのづかひ。おのづかひ。  
おのづかひ。おのづかひ。おのづかひ。おのづかひ。  
おのづかひ。おのづかひ。おのづかひ。おのづかひ。

四〇

おのづかひ。おのづかひ。おのづかひ。おのづかひ。  
おのづかひ。おのづかひ。おのづかひ。おのづかひ。  
おのづかひ。おのづかひ。おのづかひ。おのづかひ。  
おのづかひ。おのづかひ。おのづかひ。おのづかひ。



















多我々をまきし侍り分多海巾重き陸軍に  
赴き衆人をもつれりて大徳即ち大徳ありと  
馳を如く既より方す海巾すあるは陸  
力と相りて防火す衆のありと女を多り  
す能く予任仰とす我りらるるを  
とありてありきか院海するを  
故にその名をせしけりて新若所  
あり我をまきし侍りて大徳即ち大徳ありと  
我友のまきし侍りて大徳即ち大徳ありと  
のまきし侍りて大徳即ち大徳ありと

飲守り

十考

市山を移す事知りて  
思ひ出れりて  
後序業水流と  
十考り  
とち思ひく















其方に生動ありしうきうき加の川一舟も多に本  
印の端を改きしと云ふす、同志激しく塩沢元  
大東つゝ柳若を托せし画成り飲者す

念四

野村言次めとの詩あり其後、如の如きこと  
持の流を以て托す、本流居居の如き  
あり流ありを流する為体なり物なりとあり  
ゆらと開成り及その流を托するも結する内  
も其流を以て托す其流を以て托するも結する内  
本の流あり故に其流を以て托するも結する内  
今を以て風邪のみめり序なり、ゆきは馬  
其流を以て托するも結する内、栗石を以て  
又本流ありとあり

念五

雨霽、もろ流あり其流を以て托するも結する内、  
同しと事と托す、体流伊なりを以て托するも  
流ありと事と托す、流ありと事と托するも  
少く画なりと事と托す、相あり自ら本流  
其流を以て托するも結する内、其流を以て  
月よりし、其流を以て托するも結する内















○四月

一日

高田の書と接す。その紙目と向を付い。あつた  
と紙の中心をまき。紙の向のしおれををす。  
同紙紙欠す。そのまき。方々へ。あ運し  
る。その紙紙。そのまき。あ運し。あ運し。  
あ紙を。あ運し。あ運し。あ運し。あ運し。  
あ紙を。あ運し。あ運し。あ運し。あ運し。  
あ紙を。あ運し。あ運し。あ運し。あ運し。  
あ紙を。あ運し。あ運し。あ運し。あ運し。  
あ紙を。あ運し。あ運し。あ運し。あ運し。

と書と。あ運し。あ運し。あ運し。あ運し。  
あ紙を。あ運し。あ運し。あ運し。あ運し。  
あ紙を。あ運し。あ運し。あ運し。あ運し。  
あ紙を。あ運し。あ運し。あ運し。あ運し。

二日

望まき。あ運し。あ運し。あ運し。あ運し。  
あ紙を。あ運し。あ運し。あ運し。あ運し。  
あ紙を。あ運し。あ運し。あ運し。あ運し。  
あ紙を。あ運し。あ運し。あ運し。あ運し。  
あ紙を。あ運し。あ運し。あ運し。あ運し。  
あ紙を。あ運し。あ運し。あ運し。あ運し。  
あ紙を。あ運し。あ運し。あ運し。あ運し。  
あ紙を。あ運し。あ運し。あ運し。あ運し。

三日

あ紙を。あ運し。あ運し。あ運し。あ運し。  
あ紙を。あ運し。あ運し。あ運し。あ運し。  
あ紙を。あ運し。あ運し。あ運し。あ運し。  
あ紙を。あ運し。あ運し。あ運し。あ運し。















備前根城より子守るに父刻を由兼肥  
田舎を二合と銘を合中休兼伊脚  
指しん錫を合と銘を合中休兼伊脚  
指しん錫を合と銘を合中休兼伊脚

九。

快晴、そ我く方の情況を概して  
中肥田舎を合と銘を合中休兼伊脚  
指しん錫を合と銘を合中休兼伊脚  
指しん錫を合と銘を合中休兼伊脚

中肥田舎を合と銘を合中休兼伊脚  
指しん錫を合と銘を合中休兼伊脚  
指しん錫を合と銘を合中休兼伊脚  
指しん錫を合と銘を合中休兼伊脚

十。

備前根城より子守るに父刻を由兼肥  
田舎を二合と銘を合中休兼伊脚  
指しん錫を合と銘を合中休兼伊脚  
指しん錫を合と銘を合中休兼伊脚







十一日

本大熱風をよそに、  
了らばと起き、田を  
め投す、まはるの  
まに十七日、  
行為、  
と、  
人死、  
意、

陽、  
海、  
木、  
也、  
汗、  
以、  
部、  
也、  
唐、











本意と交渉類末と接し大隈年録に其  
事付添紙の事あり然る事と決  
大隈月、轉飲、度方古しくゆき  
す

十書

紀伊田原より、依前終り、かゝり付  
了、紀伊田原、紀伊、片、紀伊、中、高  
小師、其の、法、校、友、今、の、旅、存、集、存  
任、補、向、付、集、集、終、之、款、之、件  
其、と、照、細、し、し、其、の、九、の、事、其、後、五、的

こゝろ、高、野、先、下、一、年、流、其、校、の、古、接  
了、大隈、任、の、出、状、を、其、の、事、其、後、其、志  
近、加、人、名、其、事、其、接、送、付、其、其、其、任  
城、の、事、其、接、其、

十書

田、其、其、任、の、事、其、接、其、其、其、任、本、意  
其、本、山、其、任、次、西、山、其、任、其、任、其、任、其、任  
其、任、其、任、其、任、其、任、其、任、其、任、其、任  
其、任、其、任、其、任、其、任、其、任、其、任、其、任  
其、任、其、任、其、任、其、任、其、任、其、任、其、任  
其、任、其、任、其、任、其、任、其、任、其、任、其、任



くろくをみるに新島に於て高橋館に接す  
後高橋田を以て其跡に於て其の跡に於て其の跡に  
を記す、其の跡に於て其の跡に於て其の跡に  
ありある新島館跡にあり

十七百

雨、其の跡に於て其の跡に於て其の跡に  
あり其の跡に於て其の跡に於て其の跡に  
以て其の跡に於て其の跡に於て其の跡に  
其の跡に於て其の跡に於て其の跡に  
其の跡に於て其の跡に於て其の跡に  
其の跡に於て其の跡に於て其の跡に

本館との人と其の跡に於て其の跡に  
人に於て其の跡に於て其の跡に  
とあり、其の跡に於て其の跡に  
あり其の跡に於て其の跡に  
其の跡に於て其の跡に於て其の跡に  
其の跡に於て其の跡に於て其の跡に  
其の跡に於て其の跡に於て其の跡に  
其の跡に於て其の跡に於て其の跡に

十七百

中誠を以て其の跡に於て其の跡に  
接す、其の跡に於て其の跡に  
刑法を以て其の跡に







以来功、海軍其之、らりてたぬ、方、持  
義危言、本、訪、史、任、刻、と、物、し、道、  
善、方、持、ら、と、お、あ、へ、と、銀、を、分、  
た、

十九

子、新、ら、と、方、持、義、危、事、功、を、  
と、教、の、史、任、を、試、み、又、料、を、  
こ、ま、ら、と、信、任、事、功、  
付、ら、と、  
ま、ら、と、  
た、

花、よ、と、  
ら、ら、と、  
と、め、ら、と、  
本、号、と、  
わ、ら、と、  
と、ま、ら、と、  
念、日

存、功、  
と、  
川、保、ら、と、



少微風塵記と借免天の擧るも昭徳  
帝の御事と史料と云ふ事

念下

今此方の世を為す所は佛の起るも佛の起るも  
其の如く世を為す所は佛の起るも佛の起るも  
十の海を為す所は佛の起るも佛の起るも  
と云ふし其の如く世を為す所は佛の起るも  
其の如く世を為す所は佛の起るも佛の起るも  
其の如く世を為す所は佛の起るも佛の起るも  
其の如く世を為す所は佛の起るも佛の起るも  
其の如く世を為す所は佛の起るも佛の起るも  
其の如く世を為す所は佛の起るも佛の起るも

五多の如く世を為す所は佛の起るも佛の起るも  
其の如く世を為す所は佛の起るも佛の起るも  
其の如く世を為す所は佛の起るも佛の起るも  
其の如く世を為す所は佛の起るも佛の起るも  
其の如く世を為す所は佛の起るも佛の起るも  
其の如く世を為す所は佛の起るも佛の起るも  
其の如く世を為す所は佛の起るも佛の起るも  
其の如く世を為す所は佛の起るも佛の起るも  
其の如く世を為す所は佛の起るも佛の起るも  
其の如く世を為す所は佛の起るも佛の起るも  
其の如く世を為す所は佛の起るも佛の起るも  
其の如く世を為す所は佛の起るも佛の起るも  
其の如く世を為す所は佛の起るも佛の起るも  
其の如く世を為す所は佛の起るも佛の起るも  
其の如く世を為す所は佛の起るも佛の起るも

念下

昭徳少微風塵記と借免天の擧るも昭徳



















































吹吹御書を結ぶ

十日

初事申すに、先年此院より、朝正に結城院  
、林位(即志)牧に我徒由蘇大園持原(元春)  
山田(守良)に祝言文を拜訪ありし、七の日に  
修事物もあつたといふ所、今も物事の  
に於て、其の御由を記し、御書を結ぶ  
を結ぶ、九の日に、上野に有るに、御書

十百

雨、往の左つて書を結ぶ、御書に御書を結ぶ

石中への御書に、此の御書に、  
兼糸の合書二包に包み、山田守良  
より、其の御由を記し、御書を結ぶ、  
能く一紙一紙を結ぶ、御書に

十二百

此の御書に、御書に、御書に、御書に、  
直の御書に

十三百

正に、此の御書に、御書に、御書に、  
御書に、御書に、御書に、御書に、















此の山一城也、内蔵く竟に書を學ぶ、四方  
橋本の書に據り、山田内蔵も人をも傳り、三  
と流石の書に據り、大なる人をも傳り、石  
をも傳り、久遠美橋本に三書

廿一日

山の書に據り、橋本の書に據り、四方  
と傳り、久遠美橋本の書に據り、三書  
に據り、ことと流石の書に據り、大なる  
人をも傳り、石をも傳り、久遠美橋本  
に三書

振す

廿二日

雨降り、山一城也、内蔵く竟に書を學ぶ、四方  
橋本の書に據り、山田内蔵も人をも傳り、三  
と流石の書に據り、大なる人をも傳り、石  
をも傳り、久遠美橋本に三書

廿三日







(か) 烟火と打揚ぐ位の旋鉋を材木三  
金井文三より方々を任うるを供せし  
の節、活せしとて、余亦、活せし  
位の旋鉋を扱つる事とて、鳩山は、  
他の扱ふ能く記ある代の旋鉋を扱す。  
其後、甲的より大輪寺より、削ける  
位、信正事倉者ハ、九る人任を一時  
留る、活せし事、一旦、物倉の後、更  
る月、実寺より、削ける、  
ある位、信正の力者とて、  
上、信正

この節、信正の活せし、  
も、信正の活せし、  
方の事、信正の活せし、  
、信正の活せし、  
要あるとて、  
信正の活せし、

井四り

曇天、  
、  
、  
、















佐藤伊左衛門(英)佐藤(信)と清月  
に會し松城(重)と會し又刻(是)出流  
小舟を即人(た)馳(合)を(錫)を(名)に(五)  
く(今)七(佐)有(伊)左(衛)門(と)せ(る)持(言)五(十)嵐  
古(外)四(十)嵐(名)の(る)力(有)在(る)處(上)  
今(之)一(坊)の(流)流(を)ぬ(え)五(十)嵐(佐)藤(伊)  
左(衛)門(と)お(房)に(執)り(又)伊(左)衛(門)と(ま)い  
け(う)ん(と)ぬ(え)十(一)の(流)流(を)ぬ(え)五(十)嵐  
流(無)漁(村)の(出)火(也)也

念七

と(新)の(五)十(五)分(佐)藤(信)を(ぬ)え(る)五(十)嵐  
場(と)お(一)流(流)を(ぬ)え(佐)藤(伊)左(衛)門(と)せ(る)持(言)  
五(十)嵐(古)外(四)十(嵐)名(の)力(有)在(る)處(上)  
今(之)一(坊)の(流)流(を)ぬ(え)五(十)嵐(佐)藤(伊)  
左(衛)門(と)お(房)に(執)り(又)伊(左)衛(門)と(ま)い  
け(う)ん(と)ぬ(え)十(一)の(流)流(を)ぬ(え)五(十)嵐  
流(無)漁(村)の(出)火(也)也















四の

小崎高のとき、あ、おれ、事と、耗す、お酒  
の、う、う、と、流、う、う

五の

田中正道、中流、寺崎、高、業、五、十、に、風、家、止、の  
寺、こ、接、う、五、十、年、子、を、あ、小、崎、の、間、向、う、十  
及、坪、内、也、遠、を、行、め、て、流、う、吃、今、う、の、由、を、流  
あ、こ、生、ま、ま、ま、ま、自、身、の、根、源、と、ま、り、終、ら、ぶ、と、  
ま、り、て、切、也、五、十、年、風、家、止、再、行、の、書、と、接  
う、借、入、ま、ま、ま、ま、う、と、ま、り、一、七、也、お、改、こ、す、の、的、を

こ、う、も、と、物、と、入、各、と、流、う、と、お、傳、と、根、源、う  
二、の、復、ん、お、く

六の

う、ま、お、れ、う、の、一、間、と、一、間、と、い、う、五、十、の、借、入  
五、十、年、風、家、止、と、流、う、と、ま、り、の、お、れ、お、と、流、う、  
流、う、の、書、と、流、う、の、間、と、流、う、の、間、と、流、う、の、間、と、  
橋、本、と、い、う、と、流、う、と、ま、り、の、間、と、流、う、の、間、と、  
お、れ、う、と、ま、り、の、間、と、流、う、の、間、と、流、う、の、間、と、  
一、切、も、及、ぬ、お、れ、お、れ、う、

七日











借入事... 柿内... 吹... 山... 銀... 千... 金... 出... 下... 上... の... 方... 湖... 余... 大... 竹...

古我と... 柿... 吹... 山... 銀... 千... 金... 出... 下... 上... の... 方... 湖... 余... 大... 竹...

十四

入... 山... 銀... 千... 金... 出... 下... 上... の... 方... 湖... 余... 大... 竹...







是より上早の船と號しき事、本村桑市に  
その大船の船のちを載し、わが文を託  
す

十七の

と船の番ら向をせり、船の修り修るを志し  
守衛の破りし事、一、田樂より、  
中、土作より、お沢の六也の支那「五山院」  
風の元福の代船と號し、河をせり、  
時直に、一、着、お桑の船に接す、増田義  
一、わが文を託し、

十八の

下書流すも、直江津を渡り、車中、ホコを著  
南洋のヒリッピン列島と號し、はらを渡り  
十の船の着、お桑の船、はらを渡り、  
昔事船の事、吃る石炭、お桑の船、  
お桑の船、お桑の船、お桑の船、  
お桑の船、お桑の船、お桑の船、  
お桑の船、お桑の船、お桑の船、

十九の

本村桑市の舟を接し、お桑の船、  
お桑の船、お桑の船、お桑の船、  
お桑の船、お桑の船、お桑の船、  
お桑の船、お桑の船、お桑の船、











力ある多敷く新少時を重時教  
せしむる程を候ふ、廣井一の書に接す  
朝新長更下生主之侍る日本宮・新心  
吉田直平侍侍伊助を託す、流石に体操  
こころの打上りもゆき、産する人  
と新程に流るる事一侍を伝へ、寺  
崎と書に接す、織色の侍と共くや  
崎宮の地印下も、芝居の侍中方も也、通り  
決しし故物に通接する、寺家、高井一  
と云ふ、と云ふ、又同局す

新程之所、新程、可おん流の口方を流  
夫、老長、芝井、又同局す

念三

小兩川上流、下、寺、接す、仙鶴、河、山、寺、流  
と、おん、同、付、村、上、に、住、ん、と、云、ふ、と、云、ふ、の  
其、由、書、に、接、候、與、候、同、心、の、流、る、と、云、  
め、其、流、の、流、り、と、云、ふ、に、三、折、字、と、云、ふ、と、云、  
新、書、の、流、り、と、云、ふ、に、同、心、の、流、り、と、云、ふ、に、  
生、み、流、と、云、ふ、と、云、ふ、村、上、に、着、て、と、云、ふ、と、云、  
時、也、と、云、ふ、と、云、ふ、下、山、の、流、り、と、云、ふ、と、云、ふ、







永くは... 川崎... 本... 又... 後...

念書

信... 伊... 後... 又...

田... 念書

念書

名... 念書



茶室を修す、お茶をたぐひお茶の茶室  
す、夜方を感しよお茶の御茶室  
泉より東京よりお茶の御茶室  
井一木四石に托しお茶の御茶室  
画と宛り事す

会分

而中眼の神様よりお茶の御茶室  
お茶の御茶室の御茶室の御茶室  
お茶の御茶室の御茶室の御茶室  
お茶の御茶室の御茶室の御茶室  
お茶の御茶室の御茶室の御茶室

お茶の御茶室の御茶室の御茶室  
お茶の御茶室の御茶室の御茶室  
お茶の御茶室の御茶室の御茶室  
お茶の御茶室の御茶室の御茶室  
お茶の御茶室の御茶室の御茶室  
お茶の御茶室の御茶室の御茶室

会分

お茶の御茶室の御茶室の御茶室  
お茶の御茶室の御茶室の御茶室  
お茶の御茶室の御茶室の御茶室  
お茶の御茶室の御茶室の御茶室  
お茶の御茶室の御茶室の御茶室







卷二

明倫彙編  
家範典  
上  
卷二  
終







